

Ash Wednesday

アッシュ ウェンズデー

知っておきたいキリスト教のことば (162)

灰の水曜日 はいのすいようび

日本聖公会やカトリック教会などでは、教会の暦(教会暦)を大切にしています。移動祝日である復活日(イースター)と固定祝日である降誕日(クリスマス)を中心に、一年を通してイエス様の出来事を思い起こしていきます。

そして降誕日の前には降臨節(アドベント)、復活日の前には大齋節(レント)という紫の期節が定められ、その期間に心を備えるのです。

その大齋節の最初の日を「大齋始日(灰の水曜日)」と呼び、多くの教会で礼拝がささげられています。

礼拝で使用されるのは、前年に配られた棕櫚の十字架を燃やして作った灰です。まず司式者は、次のように言います。

復活日を迎える準備の大齋節の間、わたしたちが保ち続けなければならない悔い改めのしるしとして、皆さんに灰の十字架のしるしを受けられることをお勧めします。十字架は救いのしるしです。

そして次のように言いながら、礼拝に来られた方の額に灰で十字のしるしを刻むのです。

あなたはちりであるから、ちりに帰らなければならないことを覚えなさい。罪を離れてキリストに忠誠をつくしなさい。

お葬式の中でも、わたしたちはちりに帰る存在であることが語られます。復活日を迎える準備の期間の最初に、そのような者であるにもかかわらず、手を指し延べて下さる神さまの恵みを、しっかりと受け入れるのです。

平日の礼拝ですが、機会があればぜひお越しください。

次回は「迫害」です。お楽しみに。



「ヨブと彼の友」

イリヤー・エフィーモヴィチ・レーピン

(1844-1930年)

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」

(ヨブ記1章21節)

